

出藍文庫

1-1

「紅い秋の暮れ」

近藤貴弥 著

ベージュのパンプスだった。細い足がより美しく見える、と聞いた覚えがある。同じようなパンプスを知人が買っていたような気がする。流行りだから、と言っていた気がする。チャンキーヒール、という名前だっただろうか。

待ち合わせ場所にした喫茶店に、希美は来た。写真で見ると、ずっと、大人びていた。きつと、すらつと伸びた背や羽織っているトレンチコートの子供のせいであろう。あるいは、デニムシャツの大きな襟のせいであろう。彼女の雰囲気は大人であり、社会人であった。

鎧塚みぞれは大きなマグカップに顔を隠すように、カフェオレを飲む。サンガラスとマグカップがぶつかり、吃驚し、微かに涙が浮かぶ。毎回持つてきて、かけているが、みぞれにはその意味がよく分からなかった。

「……みぞれ？」

賑々しい喫茶店の店内で、聞き慣れた小さな声で呼ばれた。みぞれは何も言わず頷いた。希美はみぞれだと分かると、安心したように笑った。久し振り、と続けられ、みぞれも久し振り、と返した。

希美は注文を済ませると、物珍しい視線をみぞれに送る。みぞれは小首を傾げ、

「どうしたの？」

と訊いた。みぞれが日本に帰国したのは、今回が初めてではなかった。定期演奏会が日本で行われる度に、訪れている。初めての帰国の時から、知人との約束を守り通し、顔が半分ぐらい隠れるサングラスと大きなハットは忘れていない。

そんなみぞれに、希美は呆れたように笑う。

「……それは、あれ、対策？」

「対策？」

「顔がバレないようにする、ような？」

みぞれは、ハットを脱ぎ、サングラスも外し、ゆっくりと店内を見渡す。バレないように、と言われたが、誰もみぞれと写真を撮ろうとしたりサインを頼もうとすることもなければ、鎧塚プロなのではないか、という囁きも聞こえてこない。

「必要、じゃない？」

「外出する時はしといた方が良いんじゃない」

「サングラスも？」

数ヶ月前ならば、腑に落ちないけれど、かけたが、今はそんな時分ではない。むしろ、マフラーやストールや手袋が欲しくなる時分だった。

「好きじゃない？」

「見にくい」

「なら外していいんじゃない」

みぞれは明るい顔の希美を見て、恥ずかしそうに微笑んだ。

みぞれの帰国は定期演奏会のためである。いつもの定期演奏会は東京や大阪なのだが、今回は京都も選ばれた。岡崎にリニョールオープンした劇場のため、とみぞれは聞かされている。

みぞれはそのことを希美に話すと、希美は連休であることを話してくれた。

そうして、二人は岡崎の喫茶店で再会したのである。何をするのか、何をしたいのか、候補は沢山出たが、少ない休みで全てを行うのは難しかった。妥協と諦めと相談を繰り返し、結局、

何をするのか一つも決められなかった。みぞれは何一つ決められなくてもよかった。久し振りの再会を、演者と聴衆という立場ではない、親友との再会を希美と分かち合いたかっただけなのだから。

希美にそのことを伝えるのは、今更や恥ずかしさがあり、言えなかった。

みぞれは演者と聴衆という立場を気にしていない。そもそも、みぞれにとって希美と聴衆は違う。みぞれにとつてしてみれば、聴衆の中に希美がいるのではなく、希美の中に聴衆がいる。そんな感覚であつた。希美は、みぞれの吹くオーボエを好きと言つてくれた最初の人である。その彼女を、大勢の中の一人、とまとめたくなかつた。

ならば、何故、みぞれと希美の立ち位置の違いを気にするかというと、みぞれ以外の楽団員や聴衆が関わっている。壇上で演奏するみぞれは、オーボエ奏者である。表現力豊かな、プロである。そのプロに近づく聴衆の一人である傘木希美を許せない者もいる。そういうことを、長い間、プロとして活動している方から教えられた。みぞれにはよく分からない感覚であつたが、プロとして演奏を続けるためには必要な感覚らしい。

「今日、どうする？」

「希美は？」

「東山つて美術館とか平安神宮しかないじゃん。印象派好きじゃないし……」

「私は印象派も好き」

「私はロココとか分かりやすい画の方が好きかな。可愛いし綺麗だし」

「観に行く？」

「印象派を？」

「うん、駄目？」

「駄目じゃないけど……」

と悩ましげな声を上げる希美は、大通りの向こうに目を遣った。美術館は、大通りの向こうにあった。けれども、街路樹が人影を遮っている。真っ赤に染まった楓が、美術館を見えなくしてしまっていた。

希美は紅葉を見上げ、言葉を失っているようだった。紅葉を見入る希美の横顔は、白々と輝

き、段々と赤みを帯びていった。それから、綺麗、と呟き、みぞれを見た。みぞれは不意に驚いた。どうしたの、と問うことなく、希美の言葉を待った。

「紅葉、観に行こう」

希美の瞳は不思議と濡れていた。みぞれの心が跳ねた。動揺を隠すように自身の髪に触れ、訊く。

「どうして？」

「どこでも良いじゃん。時間はまだあるんだし」

希美はそれだけを言うと飲みかけの珈琲を飲み干した。みぞれも追いかけるように飲んだ。二人の頬は揃って赤くなった。希美は大きな歩で店を出る。みぞれはその後ろを着いていく。冷たい風が頬に当たる。大きなハットが吹き飛びそうになり、片手で押さえる。と、みぞれの頭は軽くなった。希美の手にハットはあった。

「そんなに隠す必要ないよ。心配しなくて大丈夫だから」

心配する希美だったが、その口の端にははつきりとした笑みが見える。希美の心が跳ね回って

楽しんでるのが、みぞれにも伝わってきた。だから、みぞれも楽しくなってきた。一方で、昔のように希美に主導権を握られたままでいるのは好ましくないと思うみぞれ自身があり、せめてもの反抗を試みる。

「急がなかったら、脱げない」

「久し振りだからね、楽しくなつてきちやつた」

希美の口から微かな白い息が漏れ、照れ隠しのように笑う。希美とみぞれは足並みを揃えて、大通りを東へ向かう。二人は宇治の方で生まれ育つたため、紅葉の見所などに詳しくなかった。ただ人通りが東に流れているから、二人は東に歩を進めた。

今日、こうして足並みを揃えるまで、幾度となく希美と連絡をしてきた。彼女の声を聞くこともあれば、文書だけの時もあり、写真の時もあった。そんな連絡の取り合いを、心苦しく思っていた。中学の時から、希美とみぞれは知り合い、中高の六年間を共にした。みぞれは音大に進学し、希美は大学に進学した。それでも二人は京都で暮らしており、中高の時と比べると会う頻度は少なくなつたが、会えないわけではなかった。大学を卒業してから、二人の生活は一



変した。みぞれはプロのオーボエ奏者となり、希美は京都で会社員として生活を送るようになったからである。

以降、二人の仲を取り持つようになったのは携帯でありアプリであり電話であり写真であり動画だった。

みぞれの生活の中から、希美という温もりが抜け落ちたようだった。電話をし、声を聞き、写真で彼女の姿を見ても、その手の温もりや時と共に変わる表情は、永遠にみぞれから失われたようであった。

こうして、希美と再会できたのを、同じ時を共にでき、のぞみの心は少しずつかつての温もりを取り戻しているようだった。彼女が笑顔で歩み、その隣を歩く。そんな何気ない日常が戻ってきたことが、嬉しく思える。その希美が、オーボエを聞きに来る。みぞれにオーボエを吹く機会を与えてくれた彼女が、来る。それだけで、みぞれの緊張は不思議と和らぐ。昔のように、演奏する。緊張で微かに硬くなる指先の動きが、柔らかくなる。

二人は人混みに流されるように大通りを超え、朱色の橋の前で信号が青に変わるのを待ってい

た。大鳥居が、見える。このまま真つ直ぐ向かったところで、平安神宮があるだけだった。

「行くの？」

「他の所、行こうか」

確認をとると、希美は苦笑した。

決して、平安神宮の紅葉に心が惹かれないというわけではなかった。しかし足を運ぶのが不本意だったのは、その紅葉を希美と観に行くことに、みぞれの心は不思議と踊らなかつた。そこには、演奏会の後、楽団の者とも訪れることがあるから、という考えが働いた。希美と訪れた所に、楽団の者と来る。そういうのを、みぞれは好ましく思えなかつた。二人だけの思い出を、欲したのである。

東の方へ目を遣れば、ずっと向こうに山があつた。頂きには霧が柵引き、よく見えない。山の木々も、紅に染まつているのだろうか。川の兩岸の楓は日の光を受け、紅く濡れている。

「希美、あっち行こう」

「今日は随分と積極的だね」

「そう?」

「そう」

「気のせい」

「本当?」

「希美は、ちよつと意地悪になった?」

「気のせいじゃない?」

「気のせいじゃない」

「社会の荒波に揉まれると、そうなってしまうのよ」

と、希美は微笑に笑つて言った。みぞれは胸に針を刺されたような痛みが走つた。希美とみぞれが別々の大学に進学してから、希美がフルートを続けているのか、訊けなかつた。

希美のフルートを、みぞれは好きだつた。希美もまた、みぞれのオーボエが好きだつた。けれども、その好きが、二人の限界を決め付けてしまつていた。みぞれはもつと高いところに歩める能力を有していた。けれども希美は……。現にみぞれはプロのオーボエ奏者になり、希美は会

社員という職に就いた。

社会人になった今でも、希美がフルートを吹き続けている意味があるのだろうか。中高の時は部活があり、大学の時はみぞれと時折一緒に演奏することがあった。

しかし、今ではもう、その相手もない。聞き手がいない演奏は、悲しい。一人でも演奏することはできる。好きな曲を演奏する楽しみもある。しかし、希美は誰かに聞いてもらう楽しさを、喜びを知っている。ソロを吹いたことのある彼女が、たった一人で吹くという行為を長続きさせられるわけがなかった。

そういうことを分かっているため、みぞれは訊けなかった。けれども、時折、希美の演奏するフルートの美しい音色を聞きたいと思うことはある。伝えてしまえば、もう希美が振り返ってくれないような恐ろしさを覚える。だから、言えなかった。

昔のように、隣でその音に耳を傾けたかった。

しかし、もうそうならない。それほどまでに、二人は別々の道を歩んでしまった。

「大変？」

「んー、大変だった、かな。慣れちゃうと、まあ、こんなもんかな、って。みぞれの方が大変なんじゃない？」

「……気難しい」

「他の人が？」

「一杯、人がいるから。人によって違うから」

「どこもかしこも一緒かあ……」

希美はよく仕事の人間関係で悩んでいた。みぞれも希美と同じように悩むことはあったが、演奏に集中すればそのようなことは雑音となり、みぞれの頭から消えた。希美が他人のことを話す時、みぞれはよく、何か他のことに集中してみては？ とアドバイスを送った。それは、みぞれなりのアピールでもあった。またフルートを吹いてもいいのではないか、という。しかし、そう正直に言えなかったのは、希美がフルートを演奏してなお、と心のどこかで思っているからである。

一步を踏み出し、訊くのを恐れている。もし希美がフルートを続けていれば嬉しい。が、もう

続けていないということも有り得ないことではなかった。もし続けていなかった時、どういふ反応をするのか、みぞれ自身でも全く想像がつかなかった。どうして？ と訊いてしまおうだろうか。しかし果たして、みぞれにそう訊ける勇氣があるだろうか。そこまで踏み込める勇氣を、みぞれはまだ持ち合わせているだろうか。高校最後のあの時のような熱を、みぞれはまだ胸のどこかに残しているだろうか。

楽団に所属し、様々な理由で吹奏楽を続けている者を知った。好きだから続けている、そんなことを考えている間すらなかった、自分の演奏を好きだと言ってくれる人がいるから、この演奏を他の人にも聞いてほしいから、誰かに認められたいから……。同じくらい、吹奏楽を辞した者がいることも知った。みぞれより才能があり、上手に演奏する者もいた。けれども、今その者は楽団に所属していない。続ける理由がなくなった、才能の限界を感じた、指揮者と合わない、曲を好きになれない……。そんな数々の言葉を、みぞれは見聞きしてきた。

彼等の言葉は、みぞれの心を一つも揺り動かさなかった。ただ、そういう人もいるのだ、と思つた。が、希美の場合は違う。みぞれの心は烈しく、掻き乱される。分かっているからこそ、踏

み込めない。

みぞれが楽団に属し、演奏を続けられるのは希美の存在が大きかった。聴きに來てくれる彼女のお陰で、みぞれの演奏はずっと美しい音色を奏でられる。譜面や作曲者から音を読み取る力も、難しい指の動きも、ずっと上手くなった。

それが、みぞれにとって普通であり通常であり日常であり続ける理由だった。その希美がフルートを続けていないと知った時、みぞれは全く同じ演奏をできる自信がない。だから、訊かないつもりでおり、これからも訊くつもりはない。傘木希美という存在は、鎧塚みぞれにとって一つも色褪せない思い出。変わることはない少女であり、変えることを許さない。初めて出会い、みぞれとオーボエを引き合わせ、みぞれのオーボエを好きと言ってくれたあの時のまま。そう望み、願ひ、希う。

みぞれは何も訊かない。

希美も何も訊いてくれなければ、それで良かった。しかし、きつと、そういうわけにはいかないだらう。希美は、いつもみぞれを違う世界に連れ出してくれる。新しい喜びと苦しみを、み

それに見せてくれる。そういう人なのだ。だから、きっと、今日も……。

冷たい風が、みぞれの手に触れた。思わず、両手に息を吹きかける。陽はいつしか少し陰っており、暗い雲が広がっている。あれほど鮮やかに見えた紅葉も、なんだか重たい印象を与えられる。希美は冷えた手を揉みながら、

「すっかり秋だねえ……」

と零す。それから、みぞれの手を取った。

「みぞれの手、温かいね」

「希美の手も」

「さつき温めからね」

二人はそんなことを話しながら、紅葉に導かれるように歩いており、いつの間にか小路に迷い込んでいた。希美は慌てることなく、ゆつくりと歩み続ける。みぞれも慌てなかった。適当に歩いて行けば、大通りに出ると知っていたから。

希美は小さな声で言う。心からの賞賛のようだった。



「みぞれはオーボエ続けて、凄いな」

「希美のお陰だから」

「私は何もしてないよ。みぞれが上手だからだよ」

不自然な沈黙が、二人の間に落ちた。希美の話し相手がみぞれでなければ、次の言葉がすぐに発せられたことだろう。希美はフルートを続けているの？ と。けれども、みぞれは何も言わなかった。その沈黙が、みぞれなりの答えと受け取ったのか、希美は明るく笑う。

「私もまだ続けているんだけど、段々上手くなるのに時間がかかってさ、大変なんだよ」みぞれは忽ち笑顔を浮かべ、希美の手を強く握った。希美は驚いたようにみぞれを見たが、何も言わずに同じように握り返す。

「私も、そう。高校生や大学生の頃はもつと早く覚えられたし、上手くなった。物覚えが良かったんだけど、今はそうもいなくて、大変」

「だよー。私、きつと大学の頃が一番上手かった気がする」

「上手い人も上手くない人もいたからね。聞き分けられていたから」

「鎧塚プロはどうなんです？」

希美は茶化すように笑う。みぞれは恥ずかしそうに笑う。

「その呼ばれ方、好きじゃない」

「どうして？」

「他人行儀で好きじゃない」

「でも、そう呼ばれることもあるんでしょう？」

「希美にそう呼ばれるのは、好きじゃない」

「そっかあ……色々あるんだねえ」

みぞれは話を元に戻し、続ける。

「私の周りは、上手い下手の話じゃない」

「とととととと」

「皆、一定の水準に上手いの。後は、そう、曲をどう解釈するか。技術の問題ではなくて、心や感性の問題。どう聴かせるか、この曲を聴いてどう思ってもらいたいのか。そんなこと」

「表現力かあ……」

「まだ、苦手？」

「んー苦手って言い切れるほどじゃないと思うんだけど、こう、上手くないというか……きつと、苦手なんだと思う」

楽譜通り演奏できるのは当然。求められるのは、それから先の分野である。卓越した技術だとか、豊かな表現だとか。みぞれは幸い、その二つのどちらも有していた。けれども、希美はそういう人間ではなかった。一定の演奏能力は持っている。けれども……。みぞれはそういう人間が、演奏を辞めるのを何人も見てきた。

みぞれは心の底から、嘘偽りのない賞賛の言葉を、希美に送る。

「希美は凄いね」

「鎧塚プロ、それは嫌味と捉えていいんでしょうか？」

「違う」

「みぞれ……？」

みぞれの調子が思いの外真面目だったのが、希美は予想外だったらしい。希美は足を止め、みぞれの方を見る。不安げに揺れる希美の瞳に、みぞれは落ち着き払った調子で言葉を並べる。しかし、言葉は自然と熱を帯び始めた。

「やめていく人を沢山、見たから。希美もそうなるんじゃないかって思った。中学から続けたけれど、もういいかなって。もう上手くなれないからいいかなって。何のために演奏しているのか分からないからって。……そんな人、沢山いた。良かった、希美が続けてくれて」

最後の方の言葉は微かに涙に濡れていたかもしれない。希美の白い手が、みぞれの目の端に浮かんだ涙を拭う。冷たい手だった。微かに震えているようにすら感じ取れる。希美はみぞれの耳元で、誰かに聞かれるのを拒むかのように小さな声で、自らの思いを伝えてくる。

「ずっと、やめようかなって思ってた。でも、そう思う度に、みぞれが活躍しているって知って、私も続けようって……。やめる理由に、みぞれを持つてきちゃったら、きっと私が私のことを許せなくなるから」

希美の鼻は赤くなっていた。声に涙が混じり、調子もぐっと暗くなる。みぞれは静かにその思

いに耳を傾ける。高校最後のあの時を思い出しながら。

「過去の自分と比べても上手くなっている感触がなくて、みぞれは上手くて……追いつこう追いつこうって思ったんだけど、私はプロでも何でもなくて。やめる理由なんていくつも作れたんだけど、不思議とどれにも納得できなくて。暇な時について、吹いちゃうんだよ。下手なのに」

自嘲する希美に、みぞれは強く否定の言葉を投げた。

「そんなことない。希美のフルート、好き」

「好きと嫌い。上手いと下手は違うんだよ、みぞれ」

「でも、私は希美の奏でる音楽が聞きたい。今すぐにも」

みぞれは一步踏み出し、希美にそう言った。希美は目を丸くした後、照れたように笑う。その頬に、はつきりとした好意の色を浮かべながら。

「……みぞれは強くなったね」

「プロだから」

「関係あるの？」

「関係ある」

「どんなふうによ？」

「色々な人の演奏を聞いてきたから」

「難しいなあ……」

「希美にもきつと分かるよ」

どこで吹くのか、とかそんなことを二人は一つも話さなかった。夕焼けが市内をオレンジ色に染まる中、みぞれと希美は逃げるように大通りに出て、タクシーに飛び乗った。行き先は宇治。二人の生まれ育った町。

途中、希美の家に寄り、ケースを持ってきた。みぞれも何度も見たことのある、フルートのケース。それからの車内で、希美は沢山の言葉を並べた。みぞれの周りとは比べないでほしい、ということ。過去の希美自身とも比べないでほしいということ。上手くなるのは難しいということ。下手だということ。希美はそういうことを何度も繰り返した。みぞれはそれらの言葉に微笑を返し、彼女に自信を植えようと、大丈夫、という言葉を繰り返した。

川岸でタクシーを降り、川辺に座り込んだ。

陽はもう山の向こうに沈んだようだった。薄い夜が、宇治の町に広がる。紅葉は深々としており、希美の演奏を待っているようだった。希美は近隣に遠慮するように、小声で尋ねる。

「何がいい？」

みぞれは久し振りに聞く希美の演奏を今か今かと待ちわびる。

「希美の好きな曲」

「沢山あるよ？」

「どれも知っているから」

希美はみぞれの返答に困ったように笑った。それから、みぞれには敵わないなあ、とも零した。希美の唇に、フルートが添えられる。ふっ、と息が吹き込まれる。一つ、二つ、と音が紡がれ、みぞれはその曲が高校最後の夏に一緒に吹いた曲だと瞬時に分かった。当然、高校の時よりも上手くなっている。しかし、希美本人が認めていたように、大学の時分と比べると艶やかではなかった。希美自身の不安や迷いが、そのまま音に乗っていた。希美の不安や迷いが何なのか、み

それには分からない。きつと、私生活や仕事に関するであろう。高校や大学の時にはなかったような。みぞれは、それらのことを解決できるほど賢くなければ器用でもなかった。

ゆえに、みぞれはただ、黙つて、希美の演奏に耳を傾けていた。みぞれの胸の内には沢山の言葉が溢れそうだった。希美がフルートを続けていることに関する喜び、一人で吹き続けている悲しみや寂しさ、音楽を続けられる楽しさや苦しみ……。みぞれは強く沈黙を守った。希美の演奏が終わるまでは、沈黙に徹した。しかし、自らの頬に浮かぶ笑みだけは、どうしようもなかった。

もし、みぞれが今、オーボエを持っていれば、すぐにでも彼女の演奏に混ざったことだろう。昔の時のように、彼女の隣で、彼女の音を追いかけて、息を吹き込み、指を動かした。そうならない、ならなかった。みぞれは今、たった一人の聴き手なのだから。

希美の演奏が終わわり、みぞれはその背中に拍手を送る。希美は恥ずかしそうに笑い、小さくお辞儀をした。

「どうだった？」



みぞれは自らの胸に手を当て、希美に送る言葉を選ぶ。どういふ言葉を送ればいいのか、と悩んだが、答えはすぐにみぞれの口から零れた。

「希美の吹くフルート、好き。だから、もしやめていたら、つて考えると胸が苦しくなった。……続けてくれて良かった」

「みぞれのお陰だよ」

「私は何もしてない」

希美の冷たい手が、みぞれの両頬を包む。冷たい息が、鼻先をくすぐる。

「みぞれの奏でるオーボエが好きだからさ、私も続けられたんだよ」

そう言うのと、希美はみぞれの側から離れ、歩き出す。みぞれは彼女の背中を追い、並び立つと希美は笑った。

「定期演奏会、行くから」

「うん、待ってる」